

# 第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

## 小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	各務原市立蘇原中学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	客観資料を根拠にしたグレーゾーンの適正就学指導成果

〈活動・研究の意義および活動報告〉

### 1、活動に至る経緯

※ CO = コーディネーター

全校生徒753名の大規模校の本校は、長年、不登校生徒数が多いことが学校課題となっている。そして、グレーゾーンの生徒に組織的に支援・指導の手が付けられていない実態もある。

令和4年度末、グレーゾーンの1年生男子の保護者から県総合病院で「境界線知能」の診断を受けその時検査したWISC-Vのデータを持っていくので担任と話がしたいとの連絡が入った。医師から特別支援学級への入級を勧められどうしたらよいか不安になって学校で相談したいとのことだった。早速ケース会議が行われた。幸い本校にはWISC-IVのデータを読み取れる教師がいた。特別支援COも入り担任・両親と教育相談を継続していく中で通常学級で就学することになった。生徒の特徴を学年チームで共通理解して連携支援することが保護者に伝えられ、本人も安心して2年生を迎えることができたのである。

そういった経緯から本実践研究への取組がスタートしていった。

### 2、活動・研究の目的（ねらい）

客観的資料を根拠にして、就学指導した成功事例を光として特別支援教育を推進し、学校課題解決の一助としていくことが目的（ねらい）である。

医療の診断・WISC-V検査から生徒の特徴を見つけ出し、良い特徴を学年で共通理解して指導する校内支援体制を構築する。そうしていく中で指導の手立てを明らかにしていき、迅速にグレーゾーンの生徒に指導・支援の手が入ることで適正な就学支援・指導の成果が得られ、不登校への予防教育ができていくと考える。

### 3、活動内容

※ 年度の初めは特別支援教育COを中心として全校生徒の支援実態を捉え、対象を絞り込んで個別の教育支援計画が作成できる生徒名を把握した。

#### 【5月～6月】 実態把握と対象生徒の絞り込み（個別の教育支援計画作成）

5月 全校生徒名簿に担任が自身の判断基準をもとに印を打ち、支援の必要な生徒名を学年で共有した。

5月 特別支援教育COは学年主任より情報収集して全校の印が付いた生徒数を校長に報告した。

6月 各学年で担任が個別支援が必要だと思う生徒を抽出し、特別支援教育COが生徒名を把握した。

6月 把握した生徒の保護者に各担任が学級適応を図るため教育支援計画を作成したい旨を口頭で伝えた。

6月 同意が得られた生徒の個別支援計画を担任が作成し、特別支援COが集約して校長に報告した。

※ 年度の中盤は、KABC-IIを実施する生徒を抽出して検査を実施し、客観検査の良さを伝えたり職員研修会を実施したりした後、保護者への働きかけやWISC-Vを購入して検査を実施した。

#### 【7月～10月】 KABC-IIの実施・職員研修会と保護者への働きかけ・検査器具等の購入・検査の実施 = KABC-IIと説明会の実施 =

6月 全校の個別支援計画を作成した生徒の中から保護者・本人の同意を得られた生徒1名に対してKABC-IIの習得度尺度検査を実施した。

7月 保護者と担任と特別支援教育COと教育相談COにKABC-IIプロフィールで分かる生徒の特徴と学級での支援方法について説明会を実施した。

= WISC-IV・KABC-IIプロフィール読み取り研修会の実施と保護者への働きかけ =

8月 教育相談COが過去に実施した本校生徒のデータをもとに職員会後、職員研修会（KABC-IIとWISC-IVのプロフィールの読み取りポイント）を開催した。

9月 月末から始まる1,2年個別懇談会に向け個別検査の希望が出そうな保護者に担任から働きかけを行った。

10月 希望が出された生徒にWISC-V検査を実施した。その後、本人・担任・保護者に知的レベルと特徴の説明会を実施した。

= 検査器具・用紙・ソフト購入 =

10月 WISC-V知能検査器具(コンプリートセット)・換算アシスタントを購入した。

=WISC-V講習会の受講=

10月 第4回WISC-V知能検査講習会を受講した。

=WISC-Vの検査実施=

11月 抽出生徒1名についてWISC-V知能検査を実施した。

※ 年度の後半は、WISC-V検査から分かった良い特徴を活かす指導を日常的に行うと共に学校・家庭・医療が連携支援していく体制を構築し、支援・指導して得た成果を確かめた。

【11月～3月】

① 【検査結果から良い特徴を見つける】

11月保護者・本人の同意を得てWISC-Vを実施した。(本報告書への記載は承諾を書面で得ている)

FSIQ 88 視空間112 流動性推理91 言語理解83ワーキングメモリー94 処理速度91だった。小5の時、県総合病院でWISC-IVを行っておりFSIQ 88と同じだったが、2つの検査を比較して明確になったのが視空間の特徴だった。視空間はWISC-Vへの主な変更点の一つでありWISC-IVでは検査できない値である。

実施生徒の特徴として、視空間の指標以外の4指標はほぼ同じ値だが視空間指標の値だけ112と個人内で抜き出ていることが挙げられる。視空間の良さを活かす支援・指導に絞って連携していった。

② 【WISC-V 利用職員研修会と特徴を活かした日常的チーム指導】

職員研修会の様子



教育相談COの呼びかけでWISC-VとWISC-IVの違いの具体を全校職員で研修し、そこから見えてくる生徒の良い特徴を理解して日常的にチーム体制で指導することとした。

生徒を指導する教科担任全員がそれぞれに考えた手立てで良い特徴を活かす指導を3月まで日常的に行うことにした。

③ 【医療連携をして医師からアドバイスを受けて支援をする】

実施生徒の学習での最大の困り感「英語」の学習であった。中学校に入学して本格的な英語学習が始まると理解が困難となり家庭で涙ぐむ姿を保護者に見せていた。保護者は、心理的な負担が重なり2次障害がでて登校渋りの様相が生まれることを大変心配されていた。個別の教育支援計画を作成する中で保護者に

医療との連携支援を希望するか尋ねると希望されたため市教育委員会にある医療連携支援事業に申し込み市総合病院の医師のアドバイスを継続的に受けることになった。11月より医療連携支援が始まった。

アドバイス→ASDの診断だが投薬の必要はない。英語のみの学習障害を判定する検査が日本にはないため、試行錯誤で対応するしかない。大好きな卓球を利用して肯定的な言葉かけで意欲喚起する。

連携 →通級担当者(特別支援教育士SV)と診察時の対面とメールで連携する。  
薬が必要はないことや、学校が医療と連携して指導することで保護者や本人に安心感が生まれ、登校渋りから不登校になるようなことは全くなかった。毎日元気に登校することで連携支援が行い易くなった。また、希望高校に行くために英語や数学に少しずつ取り組むと良いと話してもらえた。

④ 【家庭と学校が連携支援をする】

【家庭】では、早寝・早起き・朝食をとって8:15に教室で着席するよう送り出し、担任・保護者・通級担当でノートを確認して学校生活の見守り支援を行ってもらった。基本的な生活習慣が身に付いて毎日元気に学校に登校することで連携支援が行い易くなった。

【在籍学級】では、正確な位置把握を活かし教室の机椅子の整理を呼び掛ける係りを意欲的に行った。

【部活動】ではピンポン玉の位置を意識したサーブや効率的なポジション取りを意識した練習を行った。

【日常的チーム体制指導】では、各教科担任が本生徒は「物のある場所・形・大きさ・向き・位置関係を素早く認知する力がある」と捉え、授業中の姿から「位置関係を素早く正確に把握できる。図形の理解が得意。視覚的な記憶が得意。ボールパスの位置の捉えが上手い。」等、生徒の優れた行動を見つけて日常的に価値づけた。各教科担任なりの方法で適宜得意な分野を伸ばしていく指導を日常的に行った。

【通級指導教室】では、集中力を伸ばしていくことを自立課題として取り組んだ。興味が高い卓球の練習に取り組みながら次第に学級活動→学習に移行していった。卓球で使用する英単語に写真を加えて強調したり、キーボードの文字の位置把握を促してローマ字打ちで卓球に関わる英単語がノールックで打てるようにしたりしていった。

☆在籍学級・各教科の授業・通級指導教室で見られた成果を3月末にエピソード表としてまとめる予定である。

4、子どもたちへの効果(成果・課題)

⇒【成果】 研究テーマを具現し学校課題解決の一助とすることが次の①～④によってできたと考える。

①WISC-V・WISC-IV・KABC-IIを実施して特徴を客観的に捉えることで「指導方針の決定が行える・特徴についての理解の不一致が避けられる・情報交換が容易になる」ことができた。

②担任を中心に学年部や教科担任会といったチームで一致した特徴理解ができ、教科指導に関する教師の情報共有が容易になって、多くの教師で生徒の優れた行動を日常的に価値付けられるようになった。

③関わる教師がWISC-V WISC-IV KABC-IIを実施した生徒の特徴理解をして日常的に優れた行動を価値付けることでグレーゾーンの適正就学指導が進み、指導案に「個別支援が必要な生徒への手立て」の視点が入った。

④医療と連携することで保護者・本人に安心感が与えられ、連携することで卓球のために地元の高校に進学したいという願いを明確にすることができ、英単語学習に取組めるようになった。

⇒【課題】・検査をして客観資料をタイムリーにスピーディーに提供できる教員を研修機会を与えて増やす事。  
・本実践を長く続け不登校減少にどれだけ効果があったか数値で成果を示す事。